阿佐谷伊織の会通信　No. 8

編集発行：（広報担当）高木　登

第 8 回　2024 年度第 1 回「阿佐谷伊織の会」講談会

開催日：2024 年 3 月 10 日（日）14 時 20 分開演
場　所：阿佐ヶ谷ワークショップ
演　目：第一席　新作『本多静六の留学時代』
　　第二席　古典『源平盛衰記』から『那須与一の扇の的』
参加者：13 名（懇親会は全員が参加）

第一席：新作『本多静六の留学時代』

この演目は昨年、「GX トランスフォーメーション」(注) の関連で、伊織さんの母校である東京大学の依頼で新作ネタおろしされたものだという。

本多静六は、現在の東京大学農学部を卒業し、帝政ドイツに入学し、日本で初めての農学博士（林学博士）となった人物で、日比谷公園や明治神宮をはじめとする日本各地の公演の設計・造園に尽くされ、「公園の父」と呼ばれ、母校で助教授・教授を勤めた一方、蓄財にも優れ、投資家として一財産を築いた人物だという。

東大の講演ではもっと長いものであったが、今回はコンパクトにまとめ、静六の青年時代、特にドイツの海外留学時代に絞って語られた。

静六は、東京農林学校の卒業一年前に、元彰義隊隊長の本多敏三郎から娘の結婚相手に望まれ、海外留学を条件に受諾する。卒業と同時にドイツに留学し、最初ドレスデンのターラント学校に入り、半年後、ミュンヘン大学でブレンターノ教授に学ぶ。ところが、本多家が預けていた銀行が倒産し、仕送りが出来なくなったことで、手持ちの千円で過ごさねばならなくなり、卒業に四年かかるところを二年で学位を取って卒業する。

帰国後母校で教える一方早稲田大学でも教えることになるが、当時の早稲田の学生は授業態度も悪く、まともな授業が出来ない状態であった。静六は自分の教え方が悪いのだと思って、話し方を覚えるために講談を学び、その技術を応用したことで、学生たちは真面目に授業を受けるようになったという、静六と講談との結びつきのエピソードまである。

全く知らない人物の評伝であったが、非常に興味深い内容で、面白く聴かせてもらった。

（注）「GX トランスフォーメーション」とは、企業が使用するエネルギーを再生可能なグリーンエネルギーに取り変える転換をする計画。

第二席　古典『源平盛衰記』より『那須与一の扇の的』

源氏と平家の「屋島の戦い」で有名な「扇の的射ち」の逸話。

平家方が、美女を乗せた小舟の先頭に、「紅地に金の日輪が描かれた扇」を竿の先に立て、源氏方に「扇を見事射て見よ」と徴発する。これには平家方の計略が含まれていて、船底に伊賀十郎兵衛家員を潜ませ、色好みの義経が美女に見とれているようであれば射殺す計画と、万が一扇を

射貫いた時には、日輪を射貫いたことで朝廷に対する逆賊とするつもりであった。

義経は家来にその扇を射るように命じるが誰も応じない。最後に弱輩の那須与一が選ばれ、彼は馬に乗ってその小舟の近くにある小さな岩場に辿り着く。しかし、二月の海は荒れていて、小舟は波間に大きく揺れている。与一が神に祈ると、一瞬、海が静まり、与一は矢をつがえて弓を引き搾り、見事、扇を竿の先から射落とすことに成功する。

それを見て、船底に隠れていた十郎兵衛が立ち上がって踊り始めたので、与一は彼を射殺す。平家方はそれを見て怒り、与一めがけて攻め寄せるが、源氏方は無事に与一を救い出す。

軍談の語りの調子が聴きどころであり、それを十分に堪能させてくれる語り口調であった。

● 懇親会

参加者全員が懇親会に参加し、ソーシャルメディアを利用して世界に発信してグローバルな活躍を求める意見や、応援グッズの企画など、伊織さんを応援して賑やかに歓談が交わされました。

今回の開催では、いつも会場設営や進行役などを務められている藤丸健一さんが所用で参加できませんでしたが、佐竹さんが会場設営や懇親会の料理などの準備と、体調を崩された岩崎さんに代ってご主人が準備のために応援に駆けつけて下さった。また、懇親会の準備や後片付けには、中村さんと河上さんにもお世話になりました、改めてお礼を申し上げます。

● 今後の予定

（1）伊織さんの近々の予定

3 月 20 日（水）10 時から、なかの芸能小劇場にて、第 2 回「伊織のおんな」

4 月 29 日（月）11 時から、日本橋社会教育会館にて、神田香織一門会

その他、詳細は伊織さんのブログをご参考ください。

（2）次回阿佐谷伊織会の開催

日程については、後日決まり次第お知らせします。

以　上